



今回は肝臓や脾臓と並んで、沈黙の臓器と呼ばれる卵巣を考えてみましょう。「沈黙の臓器」と呼ばれる理由は、損傷や腫瘍が生じても症状に現れにくく、自覚症状が出るころには非常に悪化しているためです。卵巣は最も種類の腫瘍がでやすい臓器です。そのために卵巣がんは早期発見が難しく、治療が困難ながんの代表です。

卵巣は子宮の左右両側に一つずつあり、直径2センチ程度の大きさです。その名の通り、無数の卵を抱える巣です。卵子を取り囲む組織を間質といい、妊娠に備えて子宮の環境を整えたり、女性らしさをつくさる女性ホルモンを産生します。表面は上皮で覆われ

卵巣腫瘍



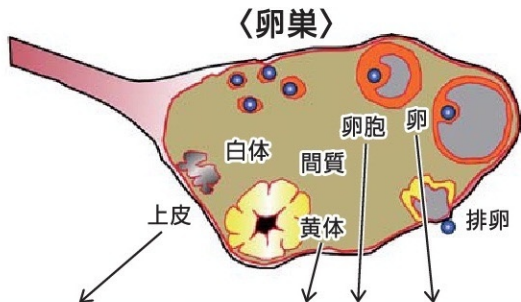
産婦人科医

今井篤志氏

ています。図。卵、間質、上皮の細胞がそれぞれ腫瘍になると、胚細胞(卵)性腫瘍、間質性腫瘍、上皮性腫瘍と呼ばれ、それぞれ特徴を持っています。女性の一生を通して卵巣に良性、あるいは悪性の腫瘍が発生する頻度は5〜10%です。

上皮細胞は分泌物を産生しますので、これが腫瘍になると内部に粘液などの液体を貯留します。これを卵巣のう腫と言い、婦人科臓器では子宮筋腫と並んで最も頻度の高い腫瘍です。かなりの大きさになるまで無

肥大するまで無症状



上皮性腫瘍	間質性腫瘍	胚細胞性腫瘍
・加齢とともに増加 ・圧迫症状が主	・ホルモンを産生 ・小さな腫瘍でも、ホルモン症状が現れる	・若年者に多い ・いろいろな組織を含む

なかの中の臓器ですので、卵巣腫瘍はたとえ良性と考えられても、正確には手術で摘出して検査してみないと分かりません。

間質性腫瘍の多くはホルモンを産生しますので、腫瘍が小さくてもホルモン症状が現れます。思春期前の女児では乳房が発育したり月経のような出血がみられます。成人では不正出血を伴いますが、高齢の女性で年齢に比べて若々しい場合や出血がある場合には、ホルモンの影響つまり間質性卵巣腫瘍を疑います。このタイプはの

急な腹痛もあり、定期検診を

腫とはならず、肉の塊のような充実性となります。

卵は受精して胎児となりますので、卵が腫瘍になると身体中のいろいろな細胞を含みます。代表的な成熟の卵性奇形腫は内部に毛髪、歯、軟骨、皮膚、皮脂などを含んでいます。胚細胞性腫瘍は思春期前に発症し多くは良性ですが、悪性なものもあります。

卵巣腫瘍は早期発見が難しく、自覚症状が出る時には腫瘍が巨大になっていることが珍しくありません。また、頻度は多くないのですが、腫瘍が破裂したり血流が途絶えたりすると激痛を伴い、緊急手術となることがあります。定期的な検診を受けていれば、緊急手術が必要になったり、突然大きな腫瘍やのう腫が指摘される事態にはなりません。1〜2年に1回は子宮がん検診が専門医の門戸を叩きましょう。(松波総合病院腫瘍内分泌センター長、羽島郡笠松町田代)